

坊^ぼっちゃん夏目^{なつめ}漱石^{そうせき}目標と
振り返り

□ わが国を代表する作家とその作品についてふれ、近代の小説や物語を読む。

親譲^{ゆず}りの無鉄砲で、子ども時から損ばかりしている。

小学校にいる時分、学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと、きく人があるかもしれぬ。別段深い理由でもない。

新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談^{だん}に、いくらいばつても、そこから飛び降りることはできまい、弱虫やあい、とはやしたからである。人におぶさつて帰ってきた時、おやじが大きな目をして、二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かすやつがあるか、と言ったから、この次は抜かさずに飛んでみせますと答えた。

親類の者から西洋製のナイフをもらって、きれいな刃^は

10

5

を日にかざして友達に見せていたら、一人が、光ることは光るが切れそうもないと言った。切れぬことがあるか、なんでも切ってみせると請^うけ合った。そんなら君の指を切ってみると注文したから、なんだ指ぐらいこのとおりだと、右の手の親指の甲^{こう}をはずに切り込んだ。幸いナイフが小さいのと、親指の骨が堅^{かた}かったので、いまだに親指は手についている。しかし、傷痕^{きずあと}は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行きつくすと、南上^{みなみあがり}がりにいささかばかりの菜園があつて、まん中にくりの木が一本立っている。これは命より大事なくりだ。実の熟する時分は、起き抜けに背戸^{せうこ}を出て、落ちたやつを拾^{ひろ}ってきて、学校

で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三、四のせがれがいた。勘太郎はむろん弱虫である。弱虫のくせに四つ目垣を乗り越えて、くりを盗みに来る。ある日の夕方、折り戸の陰に隠れて、とうとう勘太郎をつらまえてやった。その時勘太郎は逃げ道を失って、一生懸命に飛びかかってきた。向こうは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こっちの胸へ当ててぐいぐい押しした拍子に、勘太郎の頭が滑って、俺のあわせの袖の中に入った。邪魔になって手が使えぬから、むやみに手を振ったら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐらなびいた。しまい苦しがって袖の中から、俺の二の腕へ食いついた。痛かったから、勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足がらをかけて向こうへ倒してやった。山城屋の地面は、菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へまっ逆さまに落ちて、ぐうと言った。勘太郎が落ちる時に、俺のあわせの片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩、母が山城屋へわびに行つたついでに、あわせの片袖も取り返してきた。

このほか、いたずらはだいぶやった。大工の兼公と魚屋の角を連れて、茂作のにんじん畑を荒らしたことがある。にんじんの芽が出そろわぬところへ、わらが一面に敷いてあつたから、その上で三人が半日相撲をとり続けにとつたら、にんじんがみんな踏み潰されてしまった。

*背戸 P 148 下11

裏口。家の裏手にある出入口。

*四つ目垣 P 149 上3

竹を、粗く縦横に結び、その隙間が方形になるように組んだ垣根。

*折り戸 P 149 上4

ちようつがいて折り畳めるように作つた開き戸。

*つらまえる P 149 上5

つかまえる。

*鉢の開いた頭 P 149 上7

頭のまわりの大きいことをいう。

*あわせ P 149 上9

裏のついている着物。

*足がら P 149 上13

足を相手の足にからみつけて倒す技。

*六尺 P 149 上15

一尺は、約三〇・三センチメートル。

古川ふるかわのもっている田んぼの井戸を埋めて、尻しりをもち込まれたこともある。太い孟宗もうそうの節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稲に水がかかるしかけてあつた。その時分はどんなしかけか知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ差し込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰って飯を食つていたら、古川が真つ赤になつてどなり込んできた。たしか罰金を出してすんだようである。

おやじは、ちつとも俺をかわいがつてくれなかつた。

母は、兄ばかりひいきにしていた。この兄は、やに色いろが白くつて、芝居しばいのまねをして女形めがたになるのが好きだつた。俺を見るたびに、こいつはどうせろくな者にはならないと、おやじが言った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が言った。なるほどろくな者にはならない。ご覧のとおりごらんの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役ちやうぎやくに行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ二、三日前、台所で宙返りをして、へつついの角であばら骨を打って大いに痛かつた。母が

たいそう怒おこつて、おまえのような者の顔は見たくないと言いうから、親類へ泊まりに行つていた。すると、とうとう死んだという知らせが来た。そう早く死ぬとは思わなかつた。そんな大病なら、もう少しおとなしくすればよかつたと思つて帰つてきた。そうしたら例の兄が、俺を親不孝だ、俺のために、おっかさんが早く死んだんだと言いつた。くやしかつたから、兄の横つつらを張つて大変叱なられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮らしていた。おやじはなんにもせぬ男で、人の顔さえ見れば、きさまはだめだだめだと口癖くちくせのように言つていた。何がだめなんだか今いまにわからない。妙なおやじがあつたもんだ。兄は、実業家になるとか言つて、しきりに英語を勉強べんきやうしていた。元来、はつきりしない性分しやうぶんで、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一ぺんぐらいの割でけんかをしていて、ある時将棋しょうぎをさしたら、ひきような待ち駒まちこまをして、人が困るとうれしそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手にあつた飛車ひしやを眉間まゆけんへたたきつけて

やった。眉間が割れて、少々血が出た。兄がおやじに言いつけた。おやじが俺を勘当すると言いだした。

その時はもうしかたがないと観念して、先方の言うとおり勘当されるつもりでいたら、十年來召し使っている清という女が、泣きながらおやじに謝^{あやま}って、ようやくおやじの怒^{いか}りが解けた。それにもかかわらず、あまりおやじを怖いとは思わなかった。かえって、この清という女に気の毒であった。この女は、もと由緒^{ゆいしょ}のある者だったそうだが、瓦解^{がかい}の時に零落^{れいらく}して、つい奉公^{ほうこう}までするようになったのだと聞いている。だから、ばあさんである。このばあさんが、どういう因縁^{いんえん}か、俺を非常にかわいがってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前にあいそをつかした——おやじも年じゆうもてあましてい——町内では乱暴者の悪太郎^{あくたろう}とつまはじきをする——この俺を、むやみに珍重^{ちんじゆう}してくれた。俺はどうてい人に好かれるたちでない^{あきら}と諦^{あきら}めていたから、他人から木の端のように取り扱われるのはなんとも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審^{ふしん}に考えた。

15

10

5

清はときどき、台所で人のいないときに、「あなたは、まっすぐでよいご気性だ。」と褒^ほめることがときどきあった。しかし、俺には清の言う意味がわからなかった。いい気性なら、清以外の者も、もう少しよくしてくれるだろうと思つた。清がこんなことを言うたびに、俺はお

* 尻をもち込まれる P 150上1

問題の責任をもち込まれる。

* 孟宗 P 150上2

孟宗竹。竹の一種。幹が太く、節と節との間が短い。たけのこは食用。

* やに P 150上10

いやに。

* 女形 P 150上11

歌舞伎で、女性の役を演じる男性の役者。

* へつつい P 150上18

かまど。

* 今に P 150下12

いまだに。

* 待ち駒 P 150下16

将棋で、相手の王の逃げ道を予測し、前もって、自分の駒を打って逃げ

られないようにすること。

* 瓦解 P 151上9

屋根瓦^{がわら}の一部が崩れるとほかも崩れていくように、物事が次から次へ

崩れていくこと。ここでは江戸幕府倒壊と明治維新^{いしん}をさす。

世辞は嫌いだと答えるのが常であった。するとばあさんは、それだからいいご気性ですと言っては、うれしそうに俺の顔を眺めている。自分の力で俺を製造して誇つてるように見える。少々気味が悪かった。

母が死んでから、清はいよいよ俺をかわいがった。ときどきは子ども心に、なぜあんなにかわいがるのかと不審に思った。つまらない、よせばいいのにと思った。気の毒だと思った。それでも清はかわいがる。おりおりは、自分の小遣いできんつばや紅梅焼きを買ってくれる。寒い夜などは、ひそかにそば粉を仕入れておいて、いつのまにか、寝ている枕もとへそば湯を持ってきてくれる。ときには、鍋焼きうどんさえ買ってくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋ももらった。鉛筆ももらった。

帳面ももらった。これはずっとあとのことであるが、金を三円ばかり貸してくれたことさえある。なにも貸せと言ったわけではない。向こうで部屋へ持ってきて、お小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと言ってくれたんだ。俺はむろんいらなうと言ったが、ぜひ使えと

言うから、借りておいた。実は大変うれしかった。その

三円をがまぐちへ入れて、懐へ入れたなり便所へ行ったら、すぼりと後架の中へ落としてしまった。しかたがないから、のそのそ出てきて、実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒を捜してきて、取ってあげますと言った。しばらくすると井戸端でザアザア音がるから、出てみたら、竹の先へがまぐちのひもをひきかけたのを水で洗っていた。それから口をあけて壺円札を改めたら、茶色になって模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かして、これでいいでしょうと出した。ちよつと嗅いでみて臭いやと言ったら、それじゃお出しなさい、取り換えてきてあげますからと、どこでどうごまかしたか札の代わりに銀貨を三円持ってきた。この三円は何に使ったか忘れてしまった。いまに返すよと言ったぎり、返さない。今となつては、十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれるときには、必ずおやじも兄もいないときに限る。俺は何が嫌いだといって、人に隠れて自分だ

け得をするほど嫌いなことはない。兄とはむろん仲がよ
 くないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆をもら
 いたくはない。なぜ、俺一人にくれて、兄さんにはやら
 ないのかと清にきくことがある。すると、清はすました
 もので、お兄様はお父様が買ってあげなざるからか
 まいませんと言う。これは不公平である。おやじは頑固
 だけれども、そんなえこひいきはせぬ男だ。しかし、清
 の目から見るとそう見えるのだろう。全く愛に溺れてい
 たにちがいない。もとは身分のある者でも、ばあさんだ
 からしかたがない。単にこればかりではない。ひいき目
 は恐ろしいものだ。清は、俺をもつて、将来立身出世し
 て立派な者になると思いこんでいた。そのくせ、勉強を
 する兄は色ばかり白くつて、とても役には立たないと一
 人で決めてしまった。こんなばあさんにあつてはかなわ
 ない。自分の好きな者は必ず偉い人物になって、嫌いな
 人はきつと落ちぶれるものと信じている。俺は、その時
 から、別段何になるという見もなかった。しかし、清
 がなるなると言うものだから、やっぱり何かなれるん

15

10

5

だろうと思っていた。今から考えるとばかばかしい。あ
 る時などは、清にどんな者になるだろうときいてみたこ
 とがある。ところが、清にも別段の考えもなかったよう
 だ。ただ、手車へ乗って、立派な玄関のある家をこしら
 えるに相違ないと言った。

それから清は、俺がうちでももつて独立したら、一緒
 になる気でいた。どうか置いてくださいと何べんも繰り
 返して頼んだ。俺もなんだかうちがもてるような気がし

*きんつば P 152上9

きんつば焼き。小麦粉などをのばしたものであんを包み、刀のつばのよ
 うに平らに焼いた菓子。

*紅梅焼き P 152上9

小麦粉と米粉に卵・砂糖などを混ぜ、梅花の形に焼いた菓子。

*そば湯 P 152上11

そば粉を湯で溶いたもの。

*靴足袋 P 152上13

靴下。

*後架 P 152下3

便所。ここでは便壺のこと。

*手車 P 153下4

ここでは自家用の人力車のこと。

て、うん置いてやると、返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどがお好き、麴町（*）ですか麻布（*）ですか、お庭へぶらんこをおこしらえあそばせ、西洋間は一つでたくさんですなどと、勝手な計画を一人で並べていた。その時は、家なんか欲しくもなんともなかった、西洋館も日本建（*）も全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲が少なくて心がきれいだと言って、また褒めた。清は、なんと言つても褒めてくれる。

母が死んでから五、六年の間は、この状態で暮らしていた。おやじには叱られる。兄とはけんかをする。清には菓子をもらう、ときどき褒められる。別に望みもない、これでたくさんだと思つていた。他の子どもも一概（*）にこんなものだろうと思つていた。ただ、清が何かにつけて、あなたはおかわいそうだ、不幸せだとむやみに言うものだから、それじゃ、かわいそうで不幸せなんだろうと思つた。そのほかに、苦になることは少しもなかった。

ただ、おやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年めの正月に、おやじも卒中で亡（*）なつた。その年の四月に、俺はある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄はなんとか会社の九州の支店に口があつて行かなければならぬ。俺は東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は、家を売つて財産を片づけて任地へ出立（*）すると言いだした。俺はどうでもするがよかろうと返事をした。どうせ兄の厄介になる気はない。世話をしてくれるにしたところで、けんかをするから、向こうでもなんとか言いだすに決まつている。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食つてられると覚悟をした。兄はそれから道具屋を呼んできて、先祖代々のがらくたを二束三文に売つた。家屋敷は、ある人の周旋（*）で、さる金満家に譲つた。このほうはだいぶ金になつたようだが、詳しいことはいっこう知らぬ。俺は一か月以前から、しばらく前途の方向のつくまで、神田（*）の小川町へ下宿していた。清は十何年いたうちが人手に

渡るのを大いに残念がったが、自分のものでないから、しようがなかった。あなたがもう少し年をとっていらっしやれば、ここが相続ができますものと、しきりにくどいていた。もう少し年をとって相続ができるものなら、今でも相続ができるはずだ。ばあさんはなんにも知らないから、年さえとれば兄の家がもらえると信じている。

兄と俺はかように別れたが、困ったのは清の行く先である。兄はむろん連れていける身分でなし、清も兄の尻にくつついて九州まで出かける気は毛頭なし、といつてこの時の俺は四畳半の安下宿に籠もって、それすらもいざとなれば直ちに引き払わねばならぬ始末だ。どうすることもできん。清にきいてみた。どこかへ奉公でもする気かねと言ったら、あなたがおうちをもつて、奥様をおもらいになるまでは、しかたがないから、おいの厄介になりましょうと、ようやく決心した返事をした。このおいは、裁判所の書記でまず今日には差し支えなく暮らしていたから、今までも清に来るなら来いと二、三度勧め

たのだが、清はたとい奉公はしても、年来住み慣れたう

ちのほうがいいと言って応じなかった。しかし今の場合、知らぬ屋敷へ奉公替えをして、いらぬ気がねをし直すよ

り、おいの厄介になるほうがまだと思つたのだろう。

それにしても、早くうちをもての、妻をもらえの、来て世話をするのと言う。親身のおいよりも他人の俺のほうが好きなのだろう。

九州へたつ二日前、兄が下宿へ来て、金を六百円出し

*麴町 P 154 上 3

東京都千代田区にある地名。「麻布」とともに高級住宅地。

*麻布 P 154 上 3

東京都港区にある地名。

*中学校 P 154 下 3

ここでは旧制の中学校。現在の中学校一年から高等学校二年にあたる。

*商業学校 P 154 下 4

ここでは旧制の高等商業学校で、現在の「一橋大学をさすものである。

*二東三文 P 154 下 14

二東で、僅か三文の値の意味。数が多くても値段が非常に安いこと。

*神田の小川町 P 154 下 17

今の東京都千代田区神田小川町。

て、これを資本にして商売をするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意に使うがいい、そのかわりあとはかまわないと言った。兄にしては感心なやり方だ。

なんの六百円ぐらいいもらわんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊たんぱくな処置が気に入ったから、札を言つてもらつておいた。兄はそれから五十円出して、これをついでに清に渡してくれと言つたから、異議なく引き受けた。

二日たつて新橋しんばしの停車場で別れたぎり、兄にはその後一ぺんも会わない。

俺は六百円の用法について、寝ながら考えた。商売をしたつて、めんどろくきくつてうまくできるものじゃなし、ことに六百円ぐらいの金で、商売らしい商売がやれるわけでもなからう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたといばれないから、つまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割つて、一年に二百円ずつ使えば、三年間は勉強ができる。三年間一生懸命にやれば何かできる。それから、どこの学校

へ入ろうと考えたが、学問は生来どれもこれも好きでない。ことに語学とか文学とかいうものはまっぴらご免だ。新体詩しんたいしなどときは、二十行あるうちで一行もわからぬい。どうせ嫌いなものなら、何をやっても同じことだと思つたが、幸い物理ぶつり学校の前を通りかかったら生徒募集しゅうの広告が出ていたから、なにも縁だと思つて、規則書をもらつてすぐ入学の手続きをしまつた。今考えると、これも親譲りの無鉄砲から起こつた失策だ。

三年間まあ人並みに勉強はしたが、別段たちのいいほうでもないから、席順はいつでも下から勘定するほうが便利であつた。しかし不思議なもので、三年たつたらとうとう卒業してしまつた。自分でもおかしいと思つたが、苦情を言うわけもないからおとなしく卒業しておいた。

卒業してから八日めに校長が呼びにきたから、何か用だろうと思つて、出かけていったら、四国辺のある中学校で数学の教師が要る。月給は四十円だが、行つてはどうかという相談である。俺は三年間学問はしたが、実をいうと、教師になる気も田舎へ行く考えも何もなかつた。

もつとも教師以外に何をしようというあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようとして即席そくせきに返事をした。これも親譲りの無鉄砲がたたつたのである。

引き受けた以上は赴任ふにんせねばならぬ。この三年間は四畳半よじゅうはんに蟄居ぢくして、小言はただの一度も聞いたことがない。

けんかもせずすんだ。俺の生涯しょうがいのうちでは、比較的のんきな時節であった。しかしこうなると、この四畳半

も引き払わなければならぬ。生まれてから東京以外に踏

み出したのは、同級生と一緒に鎌倉かまくらへ遠足した時ばかり

である。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行か

ねばならぬ。地図で見ると、海浜で針の先ほど小さく見

える。どうせろくな所ではあるまい。どんな町で、どん

な人が住んでるかわからん。わからんでも困らない。心

配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも、少々

めんどうくさい。

家をたたんでからも、清の所へはおりおり行った。清

のおいというのは、存外ぞんがいけっこうな人である。俺が行く

たびに、おりさえすれば、なにくれともてなしてくれた。

清は俺を前へ置いて、いろいろ俺の自慢をおいに聞かせ

た。いまに学校を卒業すると麴町辺へ屋敷を買って、役

所へ通うのだなどとふいちようしたこともある。一人で

決めて一人でしゃべるから、こつちは困って顔を赤くし

た。それも一度や二度ではない。おりおり、俺が小さい

時寝小便をしたことまでもちだすには閉口した。おいは

なんと思つて清の自慢を聞いていたかわからぬ。ただ清

*新橋の停車場 P 156 上 8

旧新橋駅。東京都港区にある現在の新橋駅の東にあった。当時、東海道とうかいどう線の起点であった。

*よし P 156 上 13

たとえ（……であつても）の意味。

*新体詩 P 156 下 3

明治十年代に、西洋の詩にならつて創作された、新しい形式の詩。

*物理学校 P 156 下 5

現在の東京理科大学にあたる。

*蟄居する P 157 上 5

家の中に閉じ籠もつて外出しない。「蟄ぢく」は虫が地中に籠もるという意味。

*鎌倉 P 157 上 9

神奈川県鎌倉市。鎌倉幕府の所在地で、大仏・寺院などの史跡が多い。

*けっこうな人 P 157 上 17

好人物。

15

10

5

は昔ふうの女だから、自分と俺の関係を封建時代の主従じゆうのように考えていた。自分の主人ならおいのためにも主人に相違ないと合点がてんしたものらしい。おいこそいいつらの皮だ。

いよいよ約束が決まって、もうたつという三日前に清を訪ねたら、北向きの三畳に、風邪かぜをひいて寝ていた。

俺の来たのを見て起き直るが早いか、坊っちゃんいっつちをおもちなさいますときいた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いてくると思っている。そんなに偉い人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよばかげている。俺は単簡たんかんに当分うちはもたない。田舎へ行くんだと言ったら、非常に失望した様子で、ごま塩ごましおのびんの乱れをしきりになでた。あまり気の毒だから、「行くことは行くが、じき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る。」と慰なぐさめてやった。それでも妙な顔をしているから、「何か土産みやげを買みってきてやろう、何が欲しい。」と書いてみたら、「越後えちごのささあめが食たべたい。」と言った。越後のささあめなんて聞いたこともない。だいいち方角

が違ちがう。「俺の行く田舎には、ささあめはなさそうだ。」と言って聞かしたら、「そんなら、どっちの見当みあたりです。」ときき返した。「西の方だよ。」と言うと、「箱根はこねの先ですか、手前ですか。」と問う。ずいぶんもてあました。

15
10
5
出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中ちゆう中小間物屋で買った歯みがきとようじと手拭いを、ズックのかばんに入れてくれた。そんな物はいらないと言っても、なかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだ俺の顔をじつと見て、「もうお別れになるかもしれない。ずいぶんごきげんよう。」と、小さな声で言った。目に涙なみだがいつぱいたまっている。俺は泣かなかった。しかし、もう少して泣くところであった。汽車がよっぽど動きだしてから、もうだいじょうぶだろうと思っ、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。なんだか大変小さく見えた。

*ポツケツト P 158上9

ボケツト。

*単簡に P 158上11

単簡に。漱石の作品には、しばしば用いられている。

*びん P 158上13

頭の左右の髪かまの毛。

*越後のさざあめ P 158上17

越後は昔の国名。現在の佐渡さどを除く新潟県。葉の広く大きい越後特有のさざの葉にくるんだあめのこと。

*箱根 P 158下3

神奈川県と静岡県との境の、海岸部を除く箱根山一帯をさす。

*小間物屋 P 158下6

化粧品・身につける装飾品などのこまこました物を売る店。

この教材で学ぶ漢字

148 甲 カウ 甲乙 甲板	148 請 セイ うける 請け負う 請求 請求	148 刃 ハ 刃物	148 冗 ジョウ 冗談
149 潰 カイ つぶす 潰瘍 肝が潰れる	149 荒 コウ あらい あられる 荒野 息が荒い 荒地	149 滑 コツ すべる 滑り台 なめらか 滑らかさ	148 痕 コン あと 痕跡 弾丸の痕
150 怒 ド いかり おこる 怒り心頭 怒った顔	150 懲 チョウ こりる 懲らしめる 懲戒	150 芝 シバ 芝居	150 尻 シリ 尻込み

150 **棋** キ
棋士

150 **駒** コマ
持ち駒

151 **零** レイ
零下

151 **諦** テイ
あきらめる
諦めない
諦観

151 **褒** ホウ
ほめる
褒め言葉

152 **鉛** エン
なまり
鉛筆
鉛色

152 **捜** ソウ
さがす
捜査
捜し物

152 **壹** イチ
壹万円

152 **臭** シュウ
くさい
臭い
臭さ
嫌な臭い

153 **菓** カ
和菓子

153 **溺** デキ
おぼれる
策に溺れる
溺愛

154 **概** ガイ
概算

154 **旋** セン
旋律

156 **淡** タン
あわい
淡水
淡雪

156 **募** ボ
つふる
寄付を募る
募金

157 **即** ソク
即決

157 **赴** フ
おもむく
任地に赴く
赴任

157 **涯** ガイ
生涯

158 **慰** イ
なぐさめる
慰め
慰労

新出音訓

149 質屋 (シチ)
150 孟宗 (ソウ)
150 懲役 (エキ)

150 性分 (シヨウ)
151 謝る (あやまる)

「付表」の語

149 相撲 (すもう)
152 足袋 (たび)
155 差し支える (さしつかえる)
158 土産 (みやげ)

作品解説 『坊っちゃん』

『坊っちゃん』は発表以来、多くの人々に愛されてきた国民的な小説である。

主人公は、このあと四国の中学に赴任するのだが、
狸なぬき（校長）、赤シャツ（教頭）、山嵐やまあらし（数学教師）、うらなり
（英語教師）といったあだ名をもつ人物たちが、さまざま
ドラマを繰り広げていく。

赤シャツは周囲の人々を陥おとしれようとし、「俺」と山嵐はこ
れに反発して騒動を起こすのだが、ついには二人とも辞職し
てしまう。結局、主人公のまっすぐな性格は赴任先の世界で
は通用しなかった。だが、そこには勝手な思惑おもわくで人を陥れよ
うとする大人たちの世界に対する、作者の批判や諷刺ふうしがこめ
られているようだ。今日でも「あの人は赤シャツのようだ」
「山嵐のようだ」などといわれるほど、登場人物たちの名は
広く親しまれている。

皆さんはこれまで、小説に夢中になり、知らず知らずのう
ちに、自分の周囲の人々を作中の人物にあてはめて考えてし
まったという経験はないだろうか。作中の人物を人間の典型
的なタイプの一つに作り上げ、読んだ人がこれをとおして世

の中の見方を発見していくことのできる点に、小説のおもしろさがあるのだろうか。

『坊っちゃん』は主人公が自分のことを振り返り、回想する小説である。「今となつては」「今から考えると」といった表現が何回か出てくるが、実はその「今」とは、既に東京に帰って別の職業に就き、清も死んでしまったあとのことな
だった。

私たちは、「俺」の突拍子もない性格をユーモアと共感をもつて受け止めつつ、同時にまた、もしも本当にこのとおりの人間がいたら、周囲はやはり迷惑めいわくするかもしれない、などと考えてみたりもする。仮に「俺」の友人や兄に語らせたら、どのような小説ができあがるだろうか。また逆に、清に語らせたらどのような形になるだろうか。

このように、異なる人物の立場や見方を想像してみると、かえってこの作品の特色が見えてくるようだ。無鉄砲な主人公のかもしれないユーモアは、やはり「自分語り」ならではのものだろう。「坊っちゃん」から見ると、世の中全体がいかにおかしなものに見えるものなのか、というその「見え方」のおもしろさに、この小説の命があるのである。

夏目 漱石

[1867 - 1916]



本名、金之助。一八六七（慶応三）年、江戸牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）に生まれる。第一高等中学本科で出会った正岡子規の影響で句作を始め、「漱石」の号を用い始める。

熊本県の第五高等学校（現在の熊本大学）の教授をしていた一九〇〇（明治三十三年）年、英国に留学。経衰弱に悩まされながらも文学の研究に没頭した。帰国後、東京帝国大学などで英語を教えるが、数年後全ての教職を辞し、新聞社の専属作家となる。

漱石の作家活動は十二年ほどであったが、その間に多くの名作を残した。また、文明批評家としては当時の楽観的な「西洋かぶれ」の風潮に批判的であった。

「記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。」

『こころ』



一八六七（慶応三）年

江戸牛込馬場下横町に生まれる。

一八九二（明治二十五年）年（25歳）

東京専門学校（現慶応義塾大学）の講師となる。この頃、高浜虚子を知る。

一八九三（明治二十六年）年（26歳）

帝国大学（現東京大学）文科英文科を卒業。

一八九五（明治二十八年）年（28歳）

愛媛県尋常中学校に赴任。俳句に熱中する。

一八九六（明治二十九年）年（29歳）

第五高等学校に赴任。中根鏡子と結婚。

一九〇〇（明治三十三年）年（33歳）

英国に留学。

一九〇二（明治三十五年）年（35歳）

子規死去。年末に帰国の途につく。

一九〇五（明治三十八）年（38歳）

『ホトトギス』に『吾輩は猫である』を発表。

一九〇六（明治三十九）年（39歳）

『ホトトギス』に『坊っちゃん』を発表。

一九〇七（明治四十年）年（40歳）

新聞社専属の作家となる。

一九〇八（明治四十一年）年（41歳）

『三四郎』を連載。

一九一四（大正三年）年（47歳）

『こころ』を連載。

一九一六（大正五年）年（49歳）

胃潰瘍が悪化し、死去。



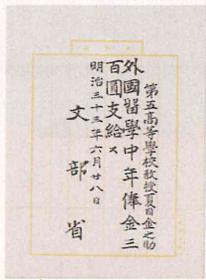
英国留学から職業作家へ



留学前の熊本時代

国に命じられた 英国留学

愛媛県尋常中学校（現在の愛媛県立松山東
高等学校）を経て、熊本県の第五高等学校で
教鞭をとっていた漱石は、一九〇〇（明治
三十三年）年、文部省から英国留学を命じられ
る。その命令内容は、希望していた英文学の
研究ではなく英語研究だったため、いったん
は固辞するが、最終的には受け入れ、第一回
文部省給費留学生として旅立った。



文部省からの給費に
関する文書

ロンドンでの留学生活

孤独な生活は苦しく、帰国後に「もっとも不愉快の二年なり」と振り返っている。家族や知人への手紙には、文学を研究することへの強い意志のほか、下宿代や書籍の物価が高く、留学費が不足していることへの不安などがつづられていた。留学中の記録などをもとにすると、生活費の三分の一を書籍代にあてていたと推定される。

また、幼い頃より親しんできた漢文学と、英文学や西洋文化との違いに深く悩み、「文学とはいかなるものか」を究明しようと研究に没頭するあまり、神経衰弱を悪化させてしまう。しかし、この留学体験が、のちの創作・評論活動に大きな影響を与えることにもなった。



最後の下宿 ザ・チェイス81

親友・正岡子規の死

漱石と正岡子規は大学予備門（のちに第一高等中学校と改称）の同級生として出会った。互いの作品に対する批評をし合うなどして友情を深め、影響を与え合った。その親交は漱石が大学を卒業し、教員になった後も続いた。

しかし、漱石留学中の一九〇二（明治三十五年）年、子規は病死。そのショックは大きく、神経衰弱に拍車をかけることになった。子規の創刊した雑誌「ホトトギス」は彼の死後、高浜虚子に引き継がれ、漱石作品の発表の場となった。

正岡子規 一八六七—一九〇二

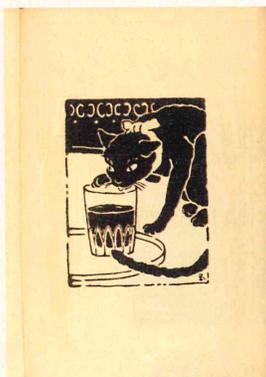
俳人・歌人



晩年、病床の子規



英国から子規に宛てたはがき



『吾輩は猫である』
挿絵（橋口五葉）

職業作家への転身

英国留学から帰国した漱石は、東京で教職に復帰する。神経衰弱を鎮めるために執筆した『吾輩は猫である』が大評判となった。その後、東京帝国大学教授への誘いを断り新聞社へ入社。職業作家としての道を歩み始める。約束された地位を自ら捨てるようなこの決断は、多くの人を驚かせた。



『ころ』（さんぼう げんこう）
（漱石山房の原稿用紙）



広がる本の世界 5

学びを深める読書案内



電子版 平家物語を読む
古典文学の世界
ながつみやすあき
永積安明

10人の登場人物の生き方が『平家物語』へと誘う。



えほん へいけ
絵本 平家物語
あんの みつよし
安野光雅

画家である安野光雅が『平家物語』を絵と文章で再現。



ビギナーズ・クラシックス
日本の古典 平家物語
かどかわしよてん
角川書店 編

あらすじ、原文、現代文による『平家物語』のダイジェスト版。



こんじやく
今昔ものがたり
しげむらみんべい
杉浦明平

『いもがゆ』など『今昔物語集』から選んだ39話を現代文で紹介。



つれづれくさ
徒然草
なかの しょうじょ
中野孝次

筆者が長年心にとどめてきた段を選び、その魅力を伝える。



増補改訂版 絵で見てわかる
はじめての古典 三巻 まくらのそうし
あなただけ
田中貴子 監修

美しいイラストや写真で清少納言の『枕草子』の世界を味わう。



こいずみ やくも
小泉八雲集
小泉八雲

イギリス人の小泉八雲（ラフカディオ＝ハーン）が描く日本。



はぎわらさくたろう
萩原朔太郎詩集
萩原朔太郎

代表作『月に吠える』『青猫』などを創作年次順に収録。



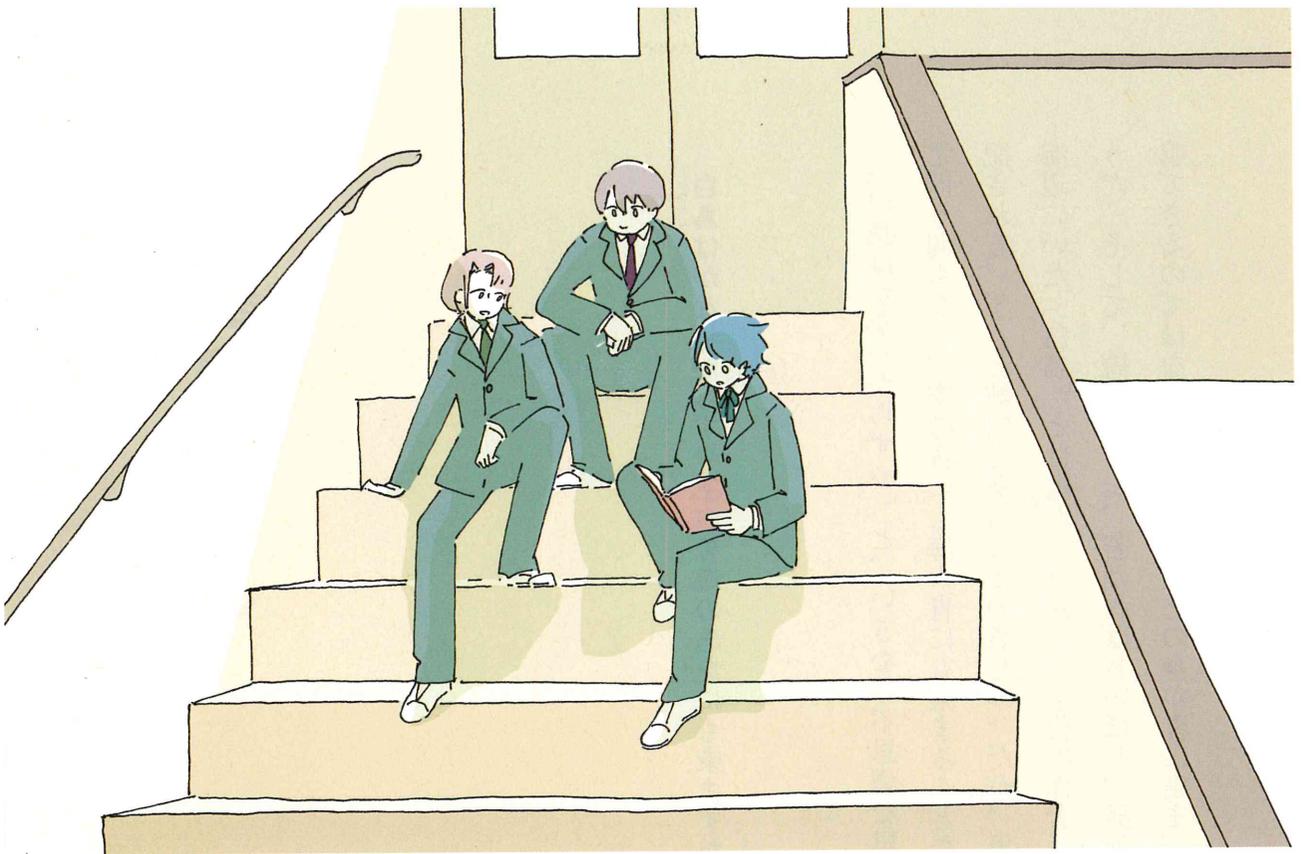
ビギナーズ・クラシックス
中国の古典 論語
かじのぶゆき
加地伸行

孔子の人生をたどりながら、『論語』の名言を味わう。



けんこう
兼好さんの遺言
きよかわたえ
清川妙

90歳の元教師が『徒然草』の言葉を読み解き、生き方を学ぶ。



六 想像を広げる

 短歌の味わい 穂村弘

  時間と構成
夏の葬列 山川 方夫

広がる本の世界 6

 映像作品の表現を考える

漢字の広場 3 漢字の多義性
漢字の練習 4